



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〜第十七号〜

処暑 八月二十三日

夏狂言

立秋が過ぎた後の暑さを残暑と呼びますが、息の長い残暑はことさらこたえるものです。昔の人々は涼を求めるために、さまざまな知恵をしぼってきました。その一つに、夏狂言というのがあります。

夏狂言というのは、七月、八月に上演される芝居のことで、水を使った演出や怪談物などで、涼味を感じさせます。江戸時代、伊勢吉市の遊郭「油屋」で起こった刃傷事件を芝居にした「伊勢音頭恋寝刃」もまた夏狂言でした。

先日、大阪の国立文楽劇場へ文楽の「伊勢音頭恋寝刃」を見に行きました。物語は、神宮の禰宜家へ養子にきた福岡貢が、かつての主君から紛失した名刀を探すよう依頼されたところ、刀は手に入れたが、折紙(刀の鑑定書)が見つからず、恋人の遊女、お紺にその探索を頼んだところから始まります。こともあろうに逆上した貢が、名刀を手に次々に殺傷を繰り返す場面は、人形の手や首が飛び、思わずヒヤリとします。場面転換の早さや、単純明快な物語の筋立てとともに、舞台装置も涼しげな夏仕様。水の文様が描かれた暖簾、簾障子。浴衣姿の人形がおおぐ団扇。着物もお紺の紫の紹、貢の白い緋と、さすが夏狂言だと思いました。

そして、人間国宝の人形浄瑠璃語り、竹本住大夫さんが伊勢からの来訪者に気づかい、「伊勢乞食」という台詞を「伊勢勧進」に改めて下さったことが、なによりもうれしく思ったのでした。夏狂言がはけて、夜の町へ出ると風がひんやり。秋はすぐそこまで近づいてきていました。

文 千種清美

